

---

# 全校集会で「火吹き」

村田憲治@山県高校

---

何がどう間違っただのか、この4月から進路指導部長になってしまった。どうして僕のように無能で無責任な男にこういう仕事をやらせるんだ。管理職の見識を疑うぞ。おかげで次から次へと襲いかかってくる仕事の山に押しつぶされそうになりながら、「サービス残業」の毎日だ。前任者の偉大さが身にしみて分かった。

---

## もうこれは火を吹くしかない

新学期早々へとへとになってるのに、新たな災難が降りかかってきた。今年から始まった「月例全校集会」の第1回めに僕が「講話」をすることになってしまったのだ。勘弁してくれ、僕が「講話」ってガウカよ。

サークルのメンバーに「腹立ち紛れに『火吹き』でもやったるか」というメールを送ってから考えた。「ちょっと待てよ、これは冗談抜きで良いアイデアかも」

うちの学校には、色々な意味で「手のかかる子」が多いんだけど、彼らとつき合っていると、ときどきこう思うことがある。

「この子たちは小学校や中学校で褒められたり大事にされたりした経験があるんだろうか？自分に自信が持てないまま、高校生になってしまったのではないか？」

この子たちを励まし、元気づけるのが僕たちの仕事だ。もうこれは火を吹くしかない。決心は固まった。すごい論理の飛躍だ。

---

## 最後に残された「イチジクの葉っぱ」

「火吹き」は僕たちのサークルがこども劇場などでやる科学広場では定番のメニューになっている。演ずるのはたいてい松尾さんだが、小川さんや加藤さんは教室でも吹いているらしい。

でも、僕はいまだに「火吹きバージョン」だ。割れたビール瓶のガラス片の上に裸で横になれるくせに、「火吹き」はできなかった。

以前、松尾さんに「同僚が顔に大火傷を負ったことがある」と脅かされたせいもあるし、「『火吹き』でいったい何を教えるのだ」などという教員くさい変なプライドもあった。つまりこれが僕に残された最後の「イチジクの葉っぱ」なのだ。

授業では割れたガラスの上でレンガ割りをやって「人間、やってできないことはないよ」なんてエラそうに言ってるけど、本当は僕も気の小さいケチな男にすぎない（普通の人はこういうことで深く悩んだりしないぞ）。だから、これを乗り越える瞬間をあの子たちに見せるしかない（どうしてそうなるのだ）。

理想的にはステージ上でのぶっつけ本番。でも全校の見守る中で大火傷を負うのもマズいよな。僕にもその程度の分別は残っていた。練習するか。しかし、家で火を吹くわけにもいかん。そうだ、実験室で暗幕を引いて密かに練習すればいいんだ。

工事用のデカイブルーシートを買ってきて、実験室の床に広げた。慎重に火災報知器の下は避けた。

金曜日4時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。暗幕を引き、ウイスキーとエタノールを調合する。体積比は1:1。見た目は水割りみたいだが、強いアルコールの匂いが鼻をつく。

ガスバーナーに火をつけたとき、以前小川さんが言ってたことを思い出した。

「まず、水を口に含んでブーツと吹く練習をするといいよ」

そうだ、まず水で練習だ。ちょっと救われた気分になって、別のコップに水を汲み、口に含んで流し台の中にブーツと吹いてみた。これくらいの勢いでいいんだろうか。2, 3度吹いてみる。上体を後ろに反らしてから身体のパネを使い、勢いをつけて思い切り吹いてみる。・・・いったい僕は何をやってるんだ。バカじゃないのか。

---

### バージン卒業！

---

水ばかり吹いてたって仕方がない。アルコールを吹こう。

ガスバーナーにもう一度火を着けて左手に持ち、右手でアルコールの入ったコップを持った。ガスバーナーの炎を見つめながら考えた。

「もしここで火傷したら、どう説明するんだ？」

どうしてもまい言い訳が見つからない。つまり失敗は絶対に許されないのだ。

意を決してアルコールを口に含んだ。あまりの不味さに思わず流し台に吐き出した。水で口を濯いで白衣の袖で口を拭いた。濃度70%のアルコールってのはこういう味か。

・・・ふと「逡巡<sup>しゅんじゆん</sup>」という単語が頭に浮かんだ。でもどういう漢字だったっけ。

自分が嫌になってきた。時計を見てみたら、4時間目が始まってからすでに15分が経過していた。隣の校舎で授業を受けている生徒の笑い声が聞こえてきた。

やけくそで、もう一度アルコールを口に含んだ。「躊躇しないで思い切り吹くんだよ」という松尾さんの声が聞こえた気がした。思い切り吹いた。

「ブワッ！」という音とともにアルコールの炎は2mほど伸びた。おお、できた！

小躍りしたい気分。その瞬間、口の中が焼けるように熱いの気がついた。火傷したわけではない。なにしろ濃度70%のアルコールだ。口の中がアルコールづけになったも同然なのだ。

急いで口を濯ぎ、パソコンの置いてある机まで走って行って、サークルの仲間宛にメールを書いた。件名は「バージン卒業！」・・・正真正銘のバカだ。

---

### 同僚はいったいどう思うだろうか

---

全校集会までに1週間もあったのに、それ以来一度も練習することなく本番の日を迎えてしまった。独りぼっちで火吹きの実習をするなんて、どう考えてもアホらしい。

朝のSHRが終わって、生徒たちがそろそろと体育館に移動し始めた。

とたんに「火吹きなんかやったら同僚はいったいどう思うだろうか」ということが気になりだ

した。

「お前、自分の立場が分かってんのか」、「わざわざ短縮授業にして時間を作ったのに、何だアしは」、「ふざけるのもいい加減にしろ」等々、叱責の言葉が次々に思い浮かぶ。止めるなら今しかない。無難な話をしてお茶をにごす方法だってあるんだ。

今度は2日前の科学広場で会ったサークルの仲間の笑顔を思い出した。

「村田さん、アルコールを遠くに飛ばすには口をこういう形にしてね、そいでブーツとやるんだよ」と口をとんがらして親切に教えてくれた小川さんや、「『バージン卒業』のメール、何事かなにごとかと思いましたよ」と屈託なく笑う加藤さん。

校長を裏切ることはできても、仲間は裏切れないじゃないか。実験室からウイスキー、エタノール、水の入ったペットボトル、コップ、タオルの入ったカゴとブルーシートを持ってきてステージの袖に置いた。

体育の先生の号令で生徒たちは比較的きちんと整列し、床に座った。司会者に促され、ついに僕の出番だ。

---

### 必要なのは、ほんの少しの勇氣

---

「おはようございます。進路指導部を代表して僕がしゃべることになりました。まあ気楽に聞いてください。さて、僕の授業を受けてる子は、僕が授業中に「レンガ割り」とか「指火」とかのとんでもないことに挑戦してることを知ってますよね」

「またレンガ割りやってー」と生徒の声。

「レンガ割りをやりながら『人間、やろうと思えばたいていのことはできる』なんてことを話したよね。まあ、今日もそのノリです。ところでこの間、3年のあるクラスで雑談してたときに、ある子が『私、簿記とかの資格も全然ないし、進路のことどうしよう?』って言うから『来月検定試験があるんじゃないかな。そこで頑張れば?』って僕が言ったら『ダメやて、どうせ私アタマ悪いもん』って言うんだよね。なんとか励ましてあげたいと思ったから今日のテーマは『やればできる。必要なのは、ほんの少しの勇氣』。で、今日はそれを見せに来ました」

演台を蹴飛ばして、ブルーシートを広げながら話を続ける。

「シドニーオリンピックの開会式で『火吹き』をしてた一団がいたでしょ。それからちょっと古いけどKISSっていうバンドのジーン・シモンズってのがライブの時に火を吹いてたんだよね。あれに挑戦してみようかと思ってアルコールとガスバーナーを用意してきました」

体育館にどよめきが走り、「おいおい、マジかよ〜」の声があがる。職員も顔を見合わせ、ちよっと動揺している様子。校長や教頭はどういう顔してんのかな、怖くて見られない。

「さすがの僕もこれは『初体験』でね。正直、怖いんだよね」だんだん調子が出てきた。

僕が「怖い」って言ってるのに生徒は目を輝かせてこちらを見つめている。なんてやつらだ。

「僕の友人で、もう60歳すぎなんだけど、この『火吹き』をやる人がいてね。その人から聞いたんだけど、へたに吹くと顔面に炎をあびて大火傷したりする恐れもあるんだって。その人の同僚が大火傷で入院したことがあるらしいんですよ」

無言でウイスキーとエタノールを調合し、バーナーに火をつけた。

緊張感は一気に高まり、体育館はしんと静まりかえった。炎を見つめながらゆっくりと深呼吸し、アルコールのコップを手を取った。

張りつめた空気の中で、ガスバーナーの炎のゴーツという音だけが聞こえる。そこですかさず「あ、ところでね」と話をそらすと、ダーツとみんながひっくり返る。いいぞいいぞ、完全に僕のペース。楽しくてたまらん。授業じゃなくて科学広場のノリだ。

アルコールの入ったコップを持ったまま、サークルの仲間に励まされて今の僕があること、人は誰だって初めから自信を持って生きてるわけじゃないんだ、なんてガラにもないことを語った。生徒さんたちも結構聞いてくれるじゃないか。悪くない気分。

校長、教頭の方を見て、「もしここで大火傷したら、労災認定されますかねえ」と聞いてみた。教頭は笑いながら頷いた。

「じゃあ、やります」

アルコールを口に含んで、小川さんのアドバイスを思い出しながら思い切り吹いた。炎は3~4mは伸びたように見えた。我ながら会心の出来だ。「うおおおおお！」という歓声と割れんばかりの拍手。

一呼吸あって「アンコール！アンコール！」のかけ声。調子に乗ってもう一度吹いた。

口の中に残ったアルコールをタオルの中に吐き出し、水で口を濯いだ。あ、この水を捨てる場所がない。仕方がないので飲み込んだ。二度も火を吹いた上に水割りを飲んだようなものだ。ちょっとフラフラする。酔っぱらったのがバレたのか、生徒がケラケラ笑ってる。

「あのさ、火を吹いたからってそれで人生が大きく変わるわけじゃないんだよね。でもね、ほんの少しだけ世の中の見え方が変わるんだ。つまらないことだけど、こういう小さな積み重ねが自信につながるんじゃないかと僕は思うよ。今日はどうもありがとう」すごい拍手をもらった。おぼつかない足取りでステージを降りた。

## 何が誰を励ましたのだろう

---

酔いが醒めたら、また不安が襲ってきた。生徒にはウケたみたいけど、同僚はどう思ってるんだろう。みんな「熱くないんですか？」とか「今日は学校へ来た甲斐があった」とか「いいものを見せてもらったあ」などと賞賛の言葉をかけてくれるんだけど、これは単なる社交辞令じゃないのか？腹の中では「このバカ」と思ってるんじゃないのか？

この日は進路指導室に閉じこもって雑務に専念し、集会のことを忘れようと努力した。それでもみんながどう感じてるのかが気になる。放課後そと職員室へ行って、各クラスの学級日誌を盗み読みした。

「今日は朝から全校集会があって、物理の先生が火を口から吐くと言って本当に口から吐いていました。人はやろうと思えば何でもできるとか言ってたけどその通りだと思った」

(担任コメント：勇気のいることです。「ちょっとの勇氣」を持ち，道を開きましょう)

「全校集会で村田先生が口から火を吹いたのがすごかった」

(担任コメント：すごかったなあ！人間やればできるということを示していただいたと思う。  
先生(自分)は何ができるのかなあ！？)

「もうすぐテストだー。みんな頑張って！」

(担任コメント：自分で一生懸命やってみることが大切。今日の集会で火を吹いた村田先生は素晴らしい！！ Let's try!)

「今日は朝から全校集会だった。村田先生が勇氣を出して口から火を吹いてくれたとき，スゴイと思った。これからいろいろ進路が決まっていくので頑張っていきたいなあと思いました」

(担任コメント：できないと思ったことでもやればできる。そしてそれを支える仲間の力……。いい話でしたね)

「朝の全校集会での火を吹く芸はすごかった。僕もやってみたいと思った」

(担任コメント：確かにすごかった。ところで話の内容は理解していますか？)

最後のは大笑いしたが，生徒や担任にも概ね好意的に受け止めてもらえてるようだ。ちょっと元気が出てきた。それから，その夜に同僚(若くてキレイな女性だ)からメールをもらった。

「今朝の火吹き，大迫力でみとれておりました。火傷などなさいませんでしたか？ やればできるかも！という勇氣と元気を頂戴いたしまして，私ももうちょっと頑張ろう！という気持ちになりました」

社交辞令でわざわざメールをくれないだろうから，この言葉は信頼できると思った。なんのことはない，今日一番励まされたのは僕だったみたいだ。

僕たちがやっている「実験」とはいったい何なのだろうか。まあ「火吹き」は厳密な意味では科学実験ではないかもしれない。でも，人を少しだけ元気づける力を持っていることは確かなようだ。そういう「文化の力」を僕たちはいつのまにか蓄えてきていたのだ。

僕個人にとっても，この日は新たな第一歩を踏み出した記念すべき日となった。脳天気にもすます拍車がかかりそうだ。

[murata@straycats.net](mailto:murata@straycats.net)

<http://physics.omosiro.tripod.com/>